

「女性視点の防災ブック」編集・検討委員会

(第2回)

議 事 録

平成29年5月17日(水)  
第一本庁舎7階 中会議室

## 午後 2 時 45 分開会

○池上委員長 それでは、定刻になりましたので、ただいまから第 2 回「女性視点の防災ブック」編集・検討委員会を開催いたします。進行は、第 1 回に引き続き、私が進めさせていただきます。

これから、委員会を進めるにあたり、諸注意を申し上げます。本会は非公開で実施しますので、どうか忌憚のないご意見を。なお、この委員会は、女性視点の防災ブック編集に関して、助言を行うものでありまして、いただいたご意見がすべて反映できるというものではないので、どうぞご了承ください。

では、さっそく次第に沿って進めさせていただきます。次第の 2 「コンセプトの説明」ですが、防災ブックのコンセプトについて、事務局からよろしく申し上げます。

○事務局 資料 1 をご覧ください。「女性職員等の意見交換会の結果について」ご説明いたします。

今回、ブックの作成を進めるのにあたりまして、主に被災地へ派遣され、そこで様々な災害対応にあたった、例えば看護師さん、保健師さんなどの都庁職員からいろいろな意見を聴きました。また、女性の消防団員、あとは自主防災組織、災害ボランティアのすべて女性の方々に集まっていただいて、座談会の形で意見交換をしていただきました。「女性視点の防災ブック」にどのようなものを載せたらいいか等についてご意見を頂いておりますので、それを先にご紹介いたします。

「女性視点の防災ブック」に掲載した方が良い内容として、いろいろなご意見を頂きましたけど、やはり女性特有のものへの備えとか、被災地で役立つものを掲載した方が良いとする意見がある一方で、災害時の防犯対策や、避難所でのトラブルに対する対処法などもしっかり書いてほしいというようなご意見も頂いております。「東京防災」について、いろいろなご意見がありました。イラストが多用されていて読みやすいという意見がある一方で、情報量が多くて何が一番重要なかがちょっと分からない、あるいは、やるが多すぎて着手するのにハードルが高いというご意見も頂いているところです。このようなご意見と、あとは委員の皆様にも個別にヒアリング等をさせていただいた意見も踏まえ、今回の防災ブックの基本的方向性を検討しました。

資料 2 をご覧ください。まず目的ですが、女性が防災の担い手として、第一歩を踏み出すきっかけづくりとするのと同時に、女性の様々な知恵や発想を生かすことで、都民のきめ細やかな災害の備えを進めるということを大きな目的としております。メインターゲットは、女性です。東京には、いろいろな属性の方々がいらっしゃいます。世代、婚姻の有無、子供がいる、いないとか、いろいろありますが、そのような様々な属性の方にも興味のある内容として、有益で使いやすいブックというのを作っていきたいと考えております。具体的な手段ですが、委員の皆様からもご意見ありましたが、やはりこれまでの防災というのは、それぞれの暮らしから遠い特別な取り組みと捉えられがちだったところですが、これをやはり暮らしながらできる防災というふうに、新たに防災の概念の意識付けをしてい

きたいなというふうに考えています。

「東京防災」とは、すべてを網羅したブックになりますが、新たな防災ブックは一つでもいいから始められる、気軽に向き合う防災のノウハウの本にしていきたいというふうに考えています。ちょっとした工夫や、小さな一つひとつのことができることの積み重ねを安心感につなげるということで、例えば、家具転倒防止でも、重い本は本棚の上に置かないとか、食器の重ね方を変えてみるなどの日常のちょっとした工夫、そういったものを積み重ねることが大事だということを基本的にコンセプトに置きたいと思います。

防災は日々の生活に根差したものとして、防災を私事化しやすいという本にしていきたいというふうに考えております。ただし、委員の皆様からもご意見を頂いておりますけれども、すべての内容を気軽に取り込めるものだけにするのではなくて、発災時の行動であるとか、避難生活への対処方法など、命を守るために必要な情報、対応というところはしっかりと記載すると、メリハリはつけていきたいなというふうに思います。後程、具体的掲載内容についてもご意見を頂きますけれども、そのような観点でぜひこういったものを載せた方がいいという意見については、どんどんおっしゃっていただければありがたいなというふうに思います。説明は以上です。

○池上委員長 ありがとうございます。説明は以上です。

次に、次第の3、議事に入らせていただきます。まずはタイトルについて検討していきたいと思います。それでは事務局から、資料の説明をお願いいたします。

○事務局 一応、ここでタイトルというようなご説明をしましたけど、今ご説明したコンセプトを具現化するキーワードというぐらいの意味合いで、ご理解いただければなと思います。実際の中身については制作会社の方から説明をしていただきたいと思います。

○制作会社 まず、タイトルについての考え方ですが、タイトルは、第一印象を決めるすごく大事なファクターとなります。私事するか、しないかというのに大きく左右するので、まず今回の資料1にありましたように、女性が自分の取り組みの第一歩として踏み出すきっかけにちゃんとなるのか。もちろん、この「東京防災」もすごくよくできていますが、やはり防災と付いただけで、“なんか自分のことじゃないな”と、行政がやってくれるのではないかなと思ってしまうところがあるので、興味を抱き、気軽に始められる敷居の低いタイトルということを前提にしたいなというふうに考えています。それと、本冊子は、防災の概念を「日頃の暮らし＝防災」、要するに日頃の暮らしが毎日続いているということは、防災が毎日続くということなので、タイトル、もしくはフォルダーというところに、「暮らし」という言葉を入れることで、「暮らし＝防災」なんだよということにしたいなということで、どちらにも「東京暮らし防災」、「たすかる暮らし」というようにタイトルに出ています。

まず、A案です。「たすかる暮らし方ブック」。いつもが命を救うのだ。生活があり、防災があるというようなことをしていると助からないよ。生活の場に地震が来るのだから、いつもが命を救うような状況にしておかなければいけないよということです。防災という

言葉を使った場合、ターゲットは自分事化しにくくなる。ショルダーは、特別に防災に取り組まなくてもいいよ、その暮らしが命を救う場合もあるのだよと。いつもというのを、こういう表現で意識を促しますというタイプになっています。なので、こちらには防災という言葉が一言も入っていませんが、「たすかる暮らし」と言われちゃうと、近所からお注分け貰って助かるみたいなニュアンスになってしまいますが、命を救うということが助かる暮らしで。ただ、今言ったようなニュアンスもイメージが膨らんで入ってくるので、とつきやすいタイトルになっているのではないかとも思っています。

2つめ、「東京くらし防災」。これは「東京防災」がありましたよね。でも、これだとやはり辞書的に全部が入っているのだけど、私のことにはなかなかなりにくい。「東京防災」の表紙にサイのイラストが入っているのですが、今度はこのサイのところに「くらし」という言葉を入れ、「暮らし=防災」と捉えた内容であることを印象づけるということです。ショルダーコピーは、いつもの東京の暮らしに一工夫加える、それだけでいいんだよと。防災のハードルを下げて、取り組みやすいということをアピールします。ターゲットにとって、私事化し、一歩踏み出すということと、「東京防災」の姉妹版というふうに知事もおっしゃっていましたが、それでも、「東京防災」のイメージを引き継ぎながら一工夫したタイトルということが言えると思います。

最後は、「BLT」。「Bousai Life Tokyo」ということなのですが、これは企画案として考えたタイトルです。今すぐできる30のこと、実はあなたがやっているお買い物だったり、お部屋の模様替えだったり、第一回目の委員会で国崎委員がおっしゃっていた、「写真を飾るということは日常的だけれども、写真のフレームがガラスだったら危ないよね、陶器だったら危ないよね。あなたがやっていることって実は生活=防災なのですよ」というような、今すぐできることという敷居の低いところから書いているのですが、徐々に敷居を上げていって、30個目ぐらいには本格的な防災も入っているというような形にしたいと思っています。「Bousai Life Tokyo」というのは、やっぱり防災というのをアルファベットで書くのと、漢字で書くのでは全然イメージが変わってしまう。これは、アルファベットにしている、今すぐできることなら30からやってくださいよという、おしゃれな企画タイトルに見せている。ただ、本のタイトルとしても「Bousai Life Tokyo」というのが魅力的だなと思って、「いつもの暮らしで命を守る」というショルダーを載せることで、「Bousai Life Tokyo」というアルファベットでフワッとしたイメージをきちんと伝えていきたい、そういうふうに変化できるのではないかなというふうに考えています。

本日は、A案とB案にくわえ、巻頭企画案として「Bousai Life Tokyo」というのを入れたいなと思いましたので、A案とB案の二つがタイトルとしておすすめしたいかなというふうに考えています。ただ、ベーコン・レタス・トマトみたいでおしゃれじゃない？女性にはこっちのほうがいいんじゃない？というようなご意見もあれば、それに变化してショルダーを付けることでタイトルになるかなというふうに思いました。以上、まずタイトルの説明でした。

○池上委員長 ありがとうございます。これからいよいよ検討に入るわけですが、皆様からいろいろなご意見をうかがいたいと思いますが、意見を述べるときにポイントをしばってご発言いただきたいと思いますが、よろしく願いいたします。タイトルについて、ご意見ございますでしょうか。

○事務局 私事化のしやすさとか、読み手が見たときの印象とか、あとは防災という言葉を使わないというところもどうかというのもあるかなと思いますので、どれが好きかとか、もしくはこういう言葉を使った方が良いのではないかとか、その辺りは皆さんご意見を言っていただきたいなど。

あくまで、たたき台ですので、これで最終どうこうではないので、ただキーワードを提示しておくイメージが湧きやすいので今回のご提案という意味です。

○国崎委員 まず、「防災」を使うかどうかなのですが、チャレンジとして防災というタイトルが付いたとしても、しっかり見てもらえるような中身にしていくのかということ。やはり、手に取ってもらうという意味では、「防災」というのを外した方がいいのか。

たぶん、売り込み方として『「東京防災」の女性版ですよ』というのであれば、あえて「防災」を入れなくてもいいかもしれません。売りこみ方にもよるのかなという気がします。単に今回の本だけ独立して見せてしまうと、「何の本だろう？」となってしまうような気がします。

○富川委員 私もそのような意見で、どこに配布されるかとか、どのような方が直接手に取られるかというところを、まずターゲットというか、どのようなルートでこれが手に取られるかが重要なのかと思います。

「防災」と入れないというのは本当にチャレンジングな話だと思っていて、とてもかっこいいなと思います。たぶん、例えばどちらかをポストインされているとしたら、「東京くらし防災」が入っていたら「何だろう？」というふうに見てくださる方はやはり増えるかなというふうには思います。ただ本当に、「東京くらし防災」というと、「東京防災」の仲間という紐づけで、もしかしたら堅いイメージに感じられる方も多いかなと思うので、個人の意見としては、チャレンジしてほしいな、チャレンジしたいなというところもあります。

○池上委員長 防災講演会でも、「防災」という字からして堅いですよね。響きも堅いということで、「防災と言わない防災」とあえて防災を2回も使っている人もいますが、何かとつきにくいというのがありまして、たしかに「防災」を使わない防災ブックというのも面白いかもしれませんね。それが、一つ意見としてありました。中島さんは、いかがでしょうか。

○中島委員 これは、私のただの個人の意見として、「防災」という言葉が堅いとか、難しいとか、とつきづらいとか、私そういうことあまりないのではないかなと感じています。というのも、「防災」って言葉がパッと目に入った時に何をしたらいいのか、何かをしなくてはいけないのではないかなという気持ちになる言葉であって、アイキャッチとしてこれだ

なというふうに思っています。

読者にアンケートを取った時も、すごく気になっているのです。たぶん防災って、保険とか、貯金とかと同じぐらい気になるんですよ。気になっているんだけど、できていないから分からないという、だから知りたい、でもやっぱり難しそうで分からないとかということなんだな。でも、それぐらい印象の強い言葉で、もう染みついているのだなという印象はあります。

「たすかる暮らし方BOOK」というのは、確かにすごく響きもいいし、なるほど読んでみようかなと思ってもらえるとは思いますが、先ほどおっしゃっていたように生活の知恵みたいに捉えられるのかなとも思ったのですよ。

なので、もし私がタイトルを付けるのだったら、「防災」という言葉は使います。例えば、それを自分事化するのだったら、「私の防災」とか。私、こちらのピンクの扉の今すぐできる30のこと、暮らし=防災という、これタイトルとしてすごく素敵だなと思ったのですよ。こういう暮らし=防災だということを謳ってしまって、今すぐできる防災なのか、私にできる防災というのって、自分にもできるかもしれない、身近かもしれない。生活にある防災みたいなことをキャッチコピーとしてタイトルに付けるというのは、私はすごくありだと思うし、イメージがしやすい。特集とかを作るときも、何の本なのかということがたぶん一発で分からないと、手に取ってもらえないというのがあると思うので、そこにすごく細心の注意を払っているところなのですが、私ならそうするなと今お聴きして。でも、自分事化したいのだったら、やっぱり「私の防災」とか「私にできる防災」、「暮らしでできる防災」みたいな言葉がいいのではないかなと、私は思いました。

○池上委員長 ありがとうございます。

○国崎委員 私、先ほどの発言の主旨は、中島さんとまったく同じです。防災という言葉を使っても、あえて挑戦と言ったのは、今までの概念を変えるような中身にすれば防災そのもののイメージを変えられるかもしれないと思います。実は、「私の」というのをやはり入れた方がいいと私も思っていて、先ほどから、「東京私らしく暮らし防災」とか、いろいろ「私らしい」とか「私の」というのを入れた方がいいのではないかなと、聞いていて同意見だったのでびっくりしました。

○五十嵐委員 私も伺っていて、「私の」という言葉がすごくいいなと思いました。でも、「防災」という言葉はやはり外した方がいいのかなとも思います。印象の強い言葉であるだけに、堅いというイメージもやはり付いているというのは事実なので、「防災」にとって代わる言葉として、例えば「私が守る」とか「私を守る」とか、そのような「私」を入れて、「防災」に代わるような少し柔らかい言葉はどうかと、今聞いていて思いました。

やはり、うちの大学の学生の世代は、「防災」という言葉になると、冊子として手に取らないかなと思います。世代によって、たぶん違うと思うので、ちょっとそこが難しいところだなと思います。

○池上委員長 共通しているのは、「私の」を入れて、今までは他人事で私には関係ないわ

ということではなく、「私の防災」がいいのかなというのは、なんとなく雰囲気でも分かりました。「いますぐできる！30のこと」、これもすごくいいなと思いました。これも私やっているじゃない、やっているじゃないというようなことがいくつかあると、本当に生活の中に、普通に暮らしながら防災を実はやっているのだというふうに気づいてもらうというのは、とても面白いなと拝見していました。

○中島委員 「たすかる」という言葉が、もしかしたらちょっと広いのかなという気はします。今、五十嵐さんがおっしゃったような自分を守るという言葉にすると、防災の印象にすごく近いけど、自分でやらなければいけないんだと、「たすかる」だと「助かったあー」という、人に助けてもらうということも含んでいるかもしれないと思います。自分で自分の身を守るのだ、という姿勢が伝わると防災らしい姿勢が伝わって、意味が伝わりやすいと思います。「防災」という言葉に、もし変わるのだとすれば、自分でやるんだということです。だから、助けてもらうのではなく、という意味が必要だと思います。

○国崎委員 たぶん富川さんがおっしゃるかもしれませんが、自分だけを守るんじゃない。

○中島委員 人を守るでもいいと思います。自分が大丈夫だったら、隣の人を守るでも、家族を守るでもいいと思うし、そういう姿勢かなとも思います。

もしかしたら、五感の問題ですが、「たすかる」という言葉だと少し広いという気はします。もし、「防災」という言葉を使わないのなら、その方がピンとくるのかなというふうに今お聴きしては思いました。

○田中委員 「防災」は、私は悪いイメージはなくて、どちらかと言うと、「防災」も「たすかる」も、どちらも一回助かって終わり感のある言葉に感じます。うちの団体では、死ぬまでにあと3回ぐらい大きな巨大地震が起きるだろうという想定の下、生きましようとしてよく言っています。一回助かったところで、震災があったとしても、また生活に戻り、また来るのだから、すべてはグラデーションであると。

だから、一発助かったからと言って、終わりじゃないということを想定したときに、「たすかる」という言葉を使ってしまうと、一回助かって終わりなので、中長期的な冊子にならなそうだなと思いました。それと、「暮らし」と言いすぎるとちょっと生ぬるすぎるなと私は思っていて、どちらかと言うと、「生き抜き方」というぐらいの強さがあっても私はいいのかと思って。今の東京はやらなければいけないという緩いレベルじゃないのだ、というぐらい言ってもらわないと私はやらないので。

○国崎委員 「生き残り防災」、みたいな。

○田中委員 そのぐらい言ってほしいです。「東京の生き残り方」みたいなタイトルの方が私は読みます。「暮らし」と言った途端に、別に私のものじゃない、「たすかる」も私のものじゃない、「私の防災」と言っても「みんなの防災」なんだな、私ではないと思ってしまいます。世間一般の私なのかもしれないけど、世間一般と私は違うと思った瞬間に、それは私の防災ではないと感じてしまいます。

○富川委員 皆さん、どこかで、なぜか生き残れると思っていませんか？「生き残り」と

出してしまうと、たぶん人ごとになってしまうのかなという気がします。

自分事になっていない大きな理由としては、自分だけはとか自分の家族だけは、自分の大切な人だけはなぜか被災者にならないというふうにとどこかで思っている部分があるので、そこを、「いや、あなたも」というような巻き込み方ができるワードというのがすごく大事なのかなと思います。

それが暮らしというのもすごく日常を連想させるのでいいかなとも思いますが、確かに醤油を借りる感が入ってしまうというのがありますよね。インパクトもあって、ちょっとギョッとさせるようなものというのが、難しいですけど。

○池上委員長 他人事じゃなくて自分のこととして考えないと、本当にいつ来るか分からないんですよというのが、いろんな文面からわかって、私も第一回目のプレゼンの時に申しましたように、ほとんどの人が食料品の備えをもうやっている気になってしまっている。それがとても心配なのと、例えば私の公演で、この人たちに会うのは二度とないかもしれないという思いでいろいろ話すものですから、資料もできるだけ文字で後から読んだら分かるようにしているのですが、後からの感想を読みますと、「いろんなことをやらなければいけないということは分かりました、だけど何から手を付けたらいいか分からない」というのを頂いて、私の反省がああいうプレゼンになったんです。

まず、命を守って、怪我しない、火事を出さないということを徹底していかないと、うちは大丈夫、隣から火が出てうちまで燃えちゃったということも困りますよね。だから、やはりみんなで防災をやらないといけないのだよというのが一貫して、それこそ一人暮らしの人、子育ての人、お年寄りもそれぞれが自分のこととしてやっていかないとはいけません。具体例を話すと、なるほどって分かってくれます。一人暮らしの人も冷蔵庫に何も入っていない、中には牛乳1本しか入っていない、それで24時間営業しているファミリーレストランがあり、コンビニがあり、今それだったら平常時は何も買い置きしてなくても生きられるんですよね。でも、ひとたび3.11のようなことが東京でもあったときに、やはり内閣府の一日前プロジェクトで一人暮らしの人を訪ねていくと、今回隣からいろいろ食べ物の差し入れがあつてとても助かった。やっぱり人のつながりが大事、挨拶ぐらいはやらなきゃというのと、少し買い置きをしなきゃと気づいた若者もいるんです。

私は、今がチャンスだと思っているのですよ。東京の防災を考えるのに、3.11で結構体験してますよね。阪神では、阪神淡路大震災からもう25年経って、人口の半分が阪神淡路大震災を知らない人たちで忘れ去られていて非常に困っていますというのを、よく仲間から聞くのです。そういうことのないようにいつも生活の中で、あなたも実はやっているじゃないですかというように気が付いて、「そうか、こういうことでもいいんだ」ということが分かるような。でも、なんか手ぬるいかなという気もしながら私も話しているのです。

例えば一つの例で、冷蔵庫の製氷皿はいっぱいしておく、とありますよね。これは、停電でストップしても氷があれば溶けたら飲料水になるよということ、そこに気が付くようなことが分かるようにしておけばすごくいいものになるのではないかなというふうに思



います。小銭を残しておくって、「これ、なんで小銭なの？」って分からない人もいるかもしれない。それから、「出かける時にトイレは済ませておく」、これとても大事なことで、うちの研究所の若い女性が3.11が起きてからエレベーターに乗っている時に、トイレに行きたくなったんです、そこはストップしてしまって。そういうことを考えると、ちょっと出かけるときに必ずトイレを済ませてから行くようにしますと、おっしゃったんです。私、それを教訓として、本当にそうだなと。トイレ一回分はバッグの中に入っているんですよ。

なので、自分がそういうふうになるかもしれないという知恵を働かせる。ちょっと自分が分かっていたらそういった行動に結びつくのかなというふうに思います。ほかに、いかがでしょうか。

○国崎委員 端的にタイトル案を伝えていいですか？この表記が日本語でなくていいのかなどうかという議論があろうかと思いますが、「私の Bousai Life Tokyo」でもいいのではないのかなと思っちゃったりもしました。そのままズバリ、「私の Bousai Life Tokyo」と思いました。以上です。

○池上委員長 ありがとうございます。「Bousai Life Tokyo」は、この横文字のままですね？

○国崎委員 そこは、例えば「私の」と言った場合、「My」にした方がいいのか、「私の」というのはやはり日本語の方がいいのではないかなと思いますが、そこら辺のセンスはお任せします。「My」では、ちょっと違うかなと思います。

○池上委員長 ほかになにか。ここにないテーマ案でもいいのですよ。

○富川委員 an・anさんの防災ブックの「ガールズライフスキル」という下のタイトルもすごくいいなと思ったのですが、ちょっと分かりにくくなっちゃうのかなとは思いますが、すごい新しい言葉だなとは思いました。ライフスキルというところが、女性が好きそうとか、ライフハックだったりとか、そういうところが響く方も多いので。ライフスキルってかっこよくて、いいかなと思いました。

○中島委員 実は、an・anの防災ブックを作る時に、「ガールズライフハック」という案は出たのです。ライフハック、自分の生命を助けてくれるものというので、でも、ものとかだけに限らずにやっぱりスキルだなという話に落ち着いて、「スキル」とサブで入れました。ただ、汎用性はきっと低めになっちゃうというか。

○富川委員 分かりづらくはなっちゃうのかな。

○中島委員 an・an世代には、たぶん良かったと思うのですが、もうちょっと広い世代に読んでもらいたいとなると、たぶんもうちょっと広い方が良いでしょう。これかなり狭い、an・anにはいいかなというタイトルだなとは思っているんですけど。

○田中委員 私は、自分の世代のことしか経験がないので分かりませんが、スキル系でいくと資格を取るのって好きじゃないですか、女性って。なので、ここまでやることだけ書かれるともうやることないので、どちらかと言うとその素材だけ教えてもらって、創意工夫は私がやるって思っちゃうんですね。昔から、こだわるのが好きだし、生み出す

のが得意なのが女性なので、本当は生み出しやすいネタだけにしておいてほしいと思いました。資格の試験の時も、答えだけの教科書を貰ってもみんなやらなくて、例えば赤と黄色を合わせたらこの色になるという情報だけを教えてもらえれば、この色のなり方によって、じゃあ服はこの色とこの色にしようみたいな妄想するきっかけがあるぐらいの方が読み続けたいと思うなと思いました。

○国崎委員 元々、関心のある分野、自分が意欲的に、情報を積極的に取り組もうというところの分野と違って、防災でまったく何をしたいか分かりませんという人が、やっぱりそこで創造的に何かをすることができないから今に至っていることも考えられますね。

○池上委員長 田中さんのような方ばかりじゃないですもんね。私も田中さんの意見、大賛成なんです。自分でやるからほっといてみたいな。素材だけ提供して下さったら、後は自分でやりますって、とても大事なことですよね。私に大事なものって、私じゃないと分からないということです。でも創意工夫できる人たちばかりじゃないところに我々頭を悩ませているわけです。

○田中委員 セットで渡すわけではないですもんね。だったら、「東京防災」に全部書いてあるから書いていないことが知りたいんですよ、私は。結局これって色を変えただけで同じじゃんと思っちゃう。

○池上委員長 同じにならないようにということで、この委員会をやっているわけですから。

○五十嵐委員 今、話に出た、スキルとか、ハックとかというのは、やはり若い世代にウケる言葉で、広い世代にと考えたときにはどうかと思います。

○富川委員 シニアの方も、もちろん見られますものね。

○五十嵐委員 私もこれを押すわけではないのですが、「心得」という言葉は、いろんな世代に通じる言葉だと思います。でも、それを漢字にしないでカタカナにして伝えるというように、そういう広い世代が分かる言葉を柔らかくというふうにした方が良いのかなと思いました。

○池上委員長 そうですね。やはり若い方たちは、ライフスキルって言うと、かつこいなという感じはしますよね。例えば、分からない人に関してはちょっとそれに日本語で一番近い言葉を書いておけば、それはいいと思うのですが、みんなに遍くウケようと思うとなかなか難しいです。どこかに絞り込まないと。

○富川委員 働く女性とかに、絞ったり。

○池上委員長 やはり女性の視点で、私たちは考えて、こういうタイトルにしましたということを知っていただけたらいいのかなというふうに思いますけど、なかなか難しいです。

○富川委員 これだけで永遠にかかってしまいそう。

○池上委員長 6人いても私はこれがいい、あれがいいって意見が割れるのは分かっていますが。

○事務局 どうターゲットに使われるか、どういう人たちに配るのかというお話がありました。が、「東京防災」は各戸に配布したり、必要な方はダウンロードしたりできるようにしたんですね。「東京防災」は網羅的に作っている。では、全てできるかということそれはできないし、いろんな方が東京の場合いるので。じゃあ、何が本当に必要なのだろうということを考えていきたい。そういう意味では、「東京防災」と、もう一つセットになるものにしませうねということにはしようとは思いますが。ただ、「東京防災」は750万部作って配った。今度は、こちらから配るというのはない。だから、興味を持ってもらって、手に取ってもらえるようなものにしてほしい。タイトルなんかは、キャッチとして目を引くものは大事だと思います。

○富川委員 自ら、取りに来る？

○事務局 取りに来てもらう。もちろん、配るところは皆さんのご意見を聞きながら、美容院とか待っているときにぱらぱらめくって読んでもらう。その辺のご意見を、また頂きたいです。基本的には、取っていく。いろんなところでアクセスできるようにはしますけども、取って行ってもらうようにはしたい、しないといけないのだと思います。こちらから配るものではない。

あとはターゲットというものを考えると、「皆さんに」ということになります。ですから、いろんな属性、要は家庭がある家庭がない、お子さんがいる、お子さんがいないとか、世代も様々ですが、必要な情報が入っていて、これは関係ないわ、とはならないようにしたいなというふうに思います。

あえて、ターゲットを明確にしてと言われると、たぶん防災がチラッと気になるけどよく分からない、たぶん大丈夫と思っている人たちがコアターゲットなのかなというところはあります。逆に言うと、皆さんのような詳しい方ではない方がコアターゲットになると思います。

○池上委員長 ありがとうございます。

この「東京防災」も、私も仕事柄、「東京防災」知っているでしょ？、「読んだ？」と言うと、「そういえば配られてましたね」なんて言う人も何人かいるんですよ。とても残念です。やっぱり自分のこととして。

それから、我が家は「東京防災」のステッカーを表札のところに貼ってあるのですが、あれを使っている人もほとんどいないし、残念だなと思います。そういうのをあきらめずに話し続けていく、情報を伝え続けていくというのはとても大事ですよ。

今、事務局がおっしゃったように、「東京防災」を見て、いろいろすべてを網羅しているのだけど、何をやっていいか分からないというところを絞り込んで、ヒントを挙げるとか、それから私事というか、あなたも実はできているじゃないですかというふうに気づく。あまりハードルを高くしないというのは、とても大事なのです。生活の中で、あなたできているじゃないということに気づいて、そうかそうかこれでいいのかという、ちょっと一歩踏み出すきっかけになったらとてもいいなというふうに思っています。

○事務局 今、「防災」を使うことのご意見とかいろいろ頂いたので、今のご意見を踏まえてもう一度検討したいと思います。

○国崎委員 よろしいですか？配布方法は、方向性として取りに来る、全戸配布ではなくて、とにかく興味があった人に配布するというのであれば、「防災」を外す必要はないと思います、目的もこれを見たいのだからと取りに来るわけですから。

それから、「東京防災」は知名度が全国でありますから、私はこの検討会に参加する前に、かなり多くの方から「「東京防災」の女性版作るんでしょ？」と言われたのです。ということは、皆さんが期待しているのですから、これほどタイトルにこだわることなく、「東京女性防災」の方がよっぽどすっきりすると思うのですよ。あれが「東京防災」の女性版ね、とストレートに伝わるのではないかなと思います。これほどまでに、タイトルをまったく違うものにする意味があるのかなというふうに思います。

○池上委員長 次に、掲載内容について議論したいと思います。事務局の方から資料4の説明をお願いいたします。

○事務局 資料4をご覧ください。このあと原稿を実際に書いていくにあたって、大まかにこういった内容のものを載せるということについて、本日ご了解いただきたいなと思います。

委員の皆様にも、個別にいろいろヒアリングさせていただいて、ご意見を頂きました。やはり、読み手の分かりやすさという観点から、基本的に時系列というのを大きな軸としてやっております。

第1章では、大きく3つに分けておまして、基本的には事前の備えということです。家の安全確保ですが、やっぱりおしゃれを犠牲にしない取り組みが大事だというようなご意見を頂いております。ですので、例えば暮らしの節目、イベントのついでの取組とか、また、いろんな世代の属性の方がいますので、一人暮らし、子供がいる方、高齢者とか、いろんな世帯ごとの安全な部屋の作り方、あるいは賃貸でもできる家具の転倒防止策等を掲載していきたいなというふうに思っています。物の備えの章では、例えばバッグに入れておきたい防災グッズ。どのような物がありますかとか、あるいは職場でこのような物を備えた方がいいであるとか、あるいは日常備蓄の効率的な方法とか。あとは属性ごと、例えば、女性、高齢者、乳児、子供、いろんな暮らし方に合わせた、例えば非常用持ち出しバッグの中身といったようなものも掲載できるのかなというふうに思っています。3つめが、心の備えということで、家族や近所の方とのコミュニケーションであるとか、あるいは消防団活動のお話、あとは子供との向き合い方です。例えば、離れて被災した時の対処法とか、子供一人で留守番してた時に、発災したらどうしようとか、あとは公衆電話の使い方を教えようとか、人との付き合い、つながりとか、あとは情報の取り方、そういった主にソフト面の内容というのを、この心の備えの中では書いていけたらなと思っています。

第2章は、発災時の取るべき行動を掲載しております。発災直後の基本行動であるとか、NG行動、あとは帰宅困難になった場合どうしたらいいのかとか、SNNを活用した、例えば

家族、友人との安否確認の方法とかです。ここは命を守るために必要な情報を掲載していきたいなと思います。

第3章は、被災後の暮らし方。これは在宅避難と避難所生活に大きく分けて掲載していきたいなと思います。まずは、在宅避難という選択肢があるんだということを伝えた上で、例えば在宅避難の判断の目安、あるいは水の確保をどうしましょう、被災時のトイレの利用をどうしましょう、例えばポリ袋を使って調理法なんかもありますといったような、在宅避難を乗り切るためのノウハウというのを、この章では掲載していきたいなと思います。避難所生活の章では、避難所ルールを守って助け合うことが重要だといったことを伝えた上で、避難所での体・心のケアの方法、あるいはペットとの同行避難の留意点とか、あとは犯罪対策・防犯対策、あるいはアレルギーを持っているお子様への対応の方法とか、あとはその他、避難所でいろんなトラブル、ストレスへの対処法というのも求められていますので、そういった避難所生活を乗り切る方法というのを、ここで掲載していきたい。あとは液体ミルクについても、こういったものがありますよというのを、この章の中で掲載をしていけたらなという考えです。

第4章は、生活再建に向けた基礎知識ということで、例えば罹災証明、災害弔慰金など、生活再建に必要な制度をここで紹介しています。あるいは、応急仮設住宅への入居方法とか、様々な経済的な支援制度がありますので、そういったものを紹介します。あとは、場合によっては、親戚とか友人を頼ることも必要であるといったようなことも含めて、紹介していきたいなと思います。

本日は、こういったものを掲載した方がいいのではないかとか、これも書いた方がいいとか、特にここは手厚くした方がいいとか、ここはこういう視点で書いた方がいいとか、そういったご意見を頂戴できればなというふうに思っております。

○池上委員長 ありがとうございます。それでは、掲載内容について、議論を進めていきたいなと思います。

○田中委員 私から2つありまして、全体を通して、おうちの中の事柄がほとんどですが、いわゆる学生さんが家とか学校じゃない所にいる率の方が高いということを学生さんもおっしゃるぐらいなので、外に出ている時の情報がやはりちょっと少ないかなと感じました。

あともう1つ、情報収集と発信の方法みたいなのところがあまりないなと思ひまして、SNSと書いてありますが、この SNS は大切な人との安否確認の手法しか書かれなさそうだなと思っていて、東京だからこそ情報発信において、嘘とかデマの見極め方とか、情報鮮度やリツイートタイミングによって、かなり昔の火災の情報が今流れちゃうみたいなのところが、東京だからこそその情報の課題かなと思っていて、それは入れておいた方がいいかなと思ひました。以上です。

○池上委員長 ありがとうございます。ほかに、ありますか。

○富川委員 どこにボリュームがあるかどうかというのは、特に今は分からない感じですか？

○事務局 はい。

○富川委員 一番初めにうかがった時は、大体「東京防災」の半分ぐらいを想定されていると。

○事務局 大体これでざっと作ってみると、130、140 ページとかそのぐらいになりそうな感じではあります。「東京防災」の半分ぐらいかなというイメージです。多くてもですね。この項目だけで、大体それぐらいのボリュームにはなるかなと思います。

○五十嵐委員 時系列で書かれているのは、とても分かりやすいかなと思います。「東京防災」と情報は重複しない方がいいのかなと思うのと、最後の項番 41 と 42 は「東京防災」にもあるので、もしかしたらもう少し時間を焦点化した内容でもいいのかなというふうに感じました。

○国崎委員 よろしいでしょうか。

○池上委員長 はい、どうぞ。

○国崎委員 女性の視点の防災ということで、全体的にその女性の視点が散りばめられているとは思いますが、手に取った方が、最初にやっぱり「東京防災」とは違うよねと思ってもらえるように、災害時の女性特有の困りごとについて触れるべきではないかなと思います。下着を変えなかったら、どういうことになるのかとか、それから女性が一人で歩くということはどういうことであるのかとか、それからやっぱり女性のデリケートの部分によって、このようなものを用意しないとどのようなふうになるのか。お子さんがいる場合には、お子さんがこうだし、それから親がいる場合には、親に対してこういうものややっぱり考えておいた方がいい。特に女性は体力がない場合、力がない場合、どうやって家族を守るのかという特性を踏まえて、具体的に最初に災害における女性の困り事というところを伝えた上で、対策は何ページというふうに見ることもできるし、また時系列に見ることもできるしというような作りこみがいいのではないかなというふうに思います。

○池上委員長 ありがとうございます。女性の困り事、いいですね。ただ、私の意見だとそれがパーンと先頭に来て、それこそ先に生き残っているところからスタートするという意味では、ちょっと心配なのです。それだけが印象付けられて。

まずは、命を守る、怪我をしない、火災を出さない備えはちゃんとしておくのですよ。それはとても大事な部分なのでそこはきちんと押さえ、避難所生活や在宅避難にしても、困ることは同じですよ。女性が困ることは同じなので、それは共通して困ることなのですよ。

それから、田中さんがおっしゃった、情報の発信と受け取り方ですけど、普段から情報って今溢れるほどあって、ちょっと調べればネットからも取れますし、携帯からも取れるということなのですが、災害が起きると情報が集まっている避難所に自分から取りにいけないといけない。それから、私たちは在宅避難をしていて、地域の被害は私たち地域の人が一番よく知っているから、私は避難所に行かなくても地域のどのような所でどんな災害が起こっているということは自分たちが発信しないと、よその方たち何も知らないのですよ

ということは伝えるのです。だから、普段と違うということ、その辺も大事かなというふうに思っています。

話があちこちに行きますが、「東京防災」を手にはできない埼玉とか千葉とか神奈川の友達から「どうやったら手に入るの？欲しい」って言われて、私も何冊か頂いて配ったことがあるのですが、そういう手に入らないと人間って欲しい、すごく良きそうだって言うのです。140円で売っても、何十冊か申し込んですぐ無くなるというぐらいですから、今度の女性版もそれぐらいのものにしていきたいなと思います。そのためには、掲載内容もということなのですが。

ここですべて言い足りるということは考えられないので。もしおうちに帰られて、またこれはちょっと抜けてたなとか、入れてほしいなということがありましたら、事務局のメールの方に。

○事務局 今月中に、事務局の方にメールでもなんでも結構ですので、ご意見頂ければこちらで受け取りますので。

○池上委員長 そうですね。

○富川委員 ここに出ている項目は、やっぱり防災にとって必要な項目だというのは、私たちは見て分かるのですが、なぜこの項目が出ているのかというようなことには必ずやっぱり体験だったりとか、経験に基づいているわけなので、例えば「避難の判断」と書いてあるときに、じゃあどういことがあったから、こういう避難や判断をするべきなのだというような紐づけができるような仕組みというのがすごく頭に入ってくるかなというふうに思うので、先ほど国崎さんがおっしゃったみたいに、やっぱりこういうことがあった、こういう困り事があったというようなことを各項目で出ていると、そういうことならありそうというふうに思ってもらえるのかなとは思いますが。これだけだと、やっぱり難しそうというふうになってしまうと思います。

○事務局 説得力が増すみたいだ。

○富川委員 そうですね。これをあえて私たちが、提案している理由というのが必要なかなと思います。

○池上委員長 それとても大事ですね。いいこと書いてあるけど、「なんでこれをするの？」という人が結構多いです。ほかに、ありますか。

○五十嵐委員 それと関係して、先ほどの会議にもお話をさせていただいたのですが、やっぱり体験談とかをどこかに入れていただきたいなと思いました。

先ほども申し上げたのですが、やっぱり自分と同じ世代の人がこういう体験をして、こういうことが良かったとか、すごく大変なことがあったというようなものを読むと、自分もこうしなければいけないとかそういう思いに、たぶんなるのではないかなと思うので、そういう体験談を載せるということと、繰り返しになりますが、シミュレーションの事例を入れていただきたいなと思います。

授業の中でも、シミュレーション教育ってすごく大事で、それをやることで定着率が全

然違うので、具体的な状況で、しかも困るような、お風呂に入っていた時に揺れましたとか、そういうちょっと困るような状況を想定して、先ほどのほろ酔いもそうだと思います。ちょっぴりお酒が入っていた時に、地下の中に入って行って、あれどうしようという時に、自分だったらまずはこの行動をしなければいけないんだというのを想定しておくというのは大事だと思うので、どこかにそれを入れていただければなと思います。

○池上委員長 大事なことですよね。いろんな状況が考えられて、本当にどこにいるかわからない。中島さん、いかがでしょう。

○中島委員 先ほど、国崎さんがおっしゃっていた、女性特有の災害時に起こることというのは、私もすごく賛成です。女性にこそ読んでほしいと思ったときに、特に女性だったらこのようなことが起こってしまう、体にこういう変調がある。例えば、力がないからこういうことが起こりやすいとか、あとはヒールはいていることが多いから転倒しやすいとか、あと長袖とかあまり持っていないからこの辺を怪我しやすいとか、いろいろあると思うのです。

逆に、女性だったらこういうものを持っているから、これが使えるみたいなこともあるかもしれない。ストール持っていますとか、リップ持っていますとか、あと水分を結構持っている人がいるとか、そういうものってあると思うので、女性の本だということを最初にちゃんと言う。「東京防災」とは違うんだというか、これを読んでもらいたいねという意味で、すごくキャッチーだし、いいと思うので、まず女性の本だというのがあって、じゃあ時系列で普段何ができるのかとか、発災時に何ができるのか、その後何ができるのかというふうに時系列が流れていくというのはすごく分かりやすい良い流れではないかなと思いました。

あと五十嵐さんがおっしゃっていた、体験談の話なのですが、私はan・anの防災ブックを作った体験しかないのですが、やっぱりリアルボイスと付けたのですが、例えば「メモ帳を持ってましよう」という項目で、「役に立つような情報はとりあえずすべてメモしました。」「口にはできない弱音を吐きだせる場所でした。」「何か書いていると気持ちが落ち着きました。」という実際の言葉を入れたのが、意外に効いていたなと思っていて、それこそ自分事なんです。自分が辛くなった時に、こう使えばいいのだというのがすごくリアルな形で伝わると共感しやすいというか、自分事にしやすいのだなというのをすごく思いました。

実は、一昨年仙台で世界防災会議があった時に、an・anを大きいパネルにして展示してくださったのですが、このリアルボイスがすごく良かったというお話を聞いて、やっぱり自分に引き付けるということが、この声の生々しさというか、リアルさによって起きたのだなというのはすごく感じまして、性差があると言ったらあれですが、女性の方がそういうところは目を引くのかな、キャッチーなのかなというふうに思いました。

○池上委員長 ありがとうございます。結構持ち歩いているスカーフとか。

○中島委員 使えるんですよね。



○池上委員長 ああいうので使えることっていっぱいありますもんね。

○中島委員 バッグ中をガラガラってやったら、意外と使える物ありますよみたいなことかもしれないし、そういうところから始めてもいいのかなと。

○池上委員長 よく怪我をすると三角巾と言いますけど、三角巾の使い方って結構難しく。練馬区の防災課から、いい冊子が出ていて、パンティストッキングを包帯代わりにしましょうと。あれすごく簡単で、だから私は一足新しいのをいつも入れて持ち歩いているのですが、いざとなったら替えにもできるし、包帯代わりにもなる。そういう女性の持ち物の中には結構役に立つ物があると思うんですよ。そんなのもちよっとご紹介できれば面白いかななんて個人的には思っています。

○田中委員 確認なのですが、液体ミルクの話って、先ほどいいなと思っていたので話していたのですが、液体ミルクって選択肢の一つであって、例えば熊本地震の時にママたちで流行った抱っこ紐とか、ふんどしとか、ほかにも女性の課題に関する解決策でムーブメント型で流行りだしているものは他にもいっぱいあるので、だったらもっとたくさんパターンを教えてほしいなと思いました。

○池上委員長 とても貴重なご意見です。第一回目の時、熊本にありましたっておっしゃっていたので、そしたら小池さんが「あれ私が持って行ったんです」とおっしゃっていましたね。

発災後って結構厚生省に認可されていなくても、外国から入ってきたらそれを持っていきますよね。なんでもありと言ったら変ですが。それをきっかけにこういう物があるのかと被災者も、周りの人も気が付く、そういう意味では熊本地震で役に立った液体ミルクみたいな、さっきの体験談じゃないですけどそういう実話をあげて、まだ日本では認可されていないけれども、実はこういう物があって、非常に災害時にも有効だし、ミルクをお湯とか、粉とかがって大変ですよ。そういうことも軽減できるし、普段の生活の中でも持ち歩きが楽なのですよというように紹介できるといいのかなというふうに思っています。

○事務局 委員の皆さんからそういうのを教えていただいて、いろいろあるよということもまず1つ情報だと思うのです。

「東京防災」からいろいろなものをマイナスしてもらった上に、ご意見を頂いたものをプラスしていくという考え方でいいと思います。「東京防災」にあるものはそっちを見てもらうことでも構わないんですよ。だったら、焦点は絞っていきたいということです。

○池上委員長 そうですね。赤ちゃんのためのグッズじゃないけど、液体ミルクもそうですし、先ほど第一回目の委員会でご紹介いただいたアメリカでは販売している哺乳瓶、ああいうのもご紹介したら「へー」という人もいるかもしれませんよね。

○五十嵐委員 プラスして、哺乳瓶のこともあるのですが、カップ授乳ができる話とか、哺乳瓶は洗うのがすごく大変なので、カップで紙コップでも授乳ができるので、そういうご紹介とかあるのかなと。

- 田中委員 へー、知りたい。
- 国崎委員 先をこうして。(実演しながら)
- 田中委員 それだけで飲めるんですか？
- 五十嵐委員 飲めます。早産の子とかは、哺乳力が弱いのでカップで飲んだりするんですけど。
- 田中委員 いいんですね。
- 五十嵐委員 いいんです、いいんです。でも、練習しなきゃいけないんですけどね。
- 田中委員 知りたいです。そういうのを入れたい。
- 池上委員長 なるほどね。812人のママと作ったというご本があったじゃないですか。あれを読むと、滅菌ガーゼにミルクを浸してあげたという。
- 富川委員 でも、滅菌ガーゼが手に入らなくて大変だったという声もやっぱりたくさん。
- 池上委員長 だから、すごいなと思いましたね。あるもので工夫をして、なんとか赤ちゃんにミルクをとるという思い、それが伝わってくるんですよ。汚い状況であげたくないというのも伝わるし、だからどれだけの情報をみんなが持っているかということが災害後の生活の仕方に関わってくるのではないかな。私はよくキャンプに行くと、物がなくて工夫して、トイレも掘って作ろうとか、それが災害後に生きるとか、そういう話もするんですけど、要はそういうことですよ。
- 「そうぞうりょく」ってクリエイションの創造力と、イマジネーションの想像力と両方が大事っていうのを私いつも思っているのですよ。この前、若い方もそんなふうにおっしゃって、私も安心したんですよ。まず自分のうちに行って、今晚寝てごらんない、寝た上でどこか地震が来たら、あれが危ないこれが危ないってまずそれをやってくださいというのを若い方から指摘があったんです。これってすごく現実的で面白いかな。そうすると、それを直さない限り、安心して眠れないでしょ？じゃあ、安心して眠れるようにしましょうよというので、家具の転倒落下移動に入っていくんですけど、すごく分かりやすい説明でした。何かありましたら。
- 国崎委員 「心の備え」とあるんですけど、「心の備え」と聞いたときにメンタルの部分かな、心のケアかなと思ってしまうところかなと。
- 田中委員 そうですね。
- 国崎委員 そこが一点気になったところ。私は、第二の田中さんとか富川さんを作っていきたい、人材育成をしていきたいと思っているんです。多くの女性に防災に関わってもらいたい。
- そういう意味では、女性が防災を学ぶには、こういった場所や機会という部分を紹介してほしいなと思います。それこそ、防災ピクニックに参加しましょうでもいいですし、私たちにイベントに参加しましょうでもいいですし、何か女性が今後もっともっと多く関わってもらえるように。
- 富川委員 アクションに繋がる情報を入れたいですよ。

○国崎委員 防災を学ぶには、どこで学べるのかという部分も入れていただきたいなと思います。以上です。

○池上委員長 とても大切ですね。ここに行く情報が取りに行けそうとか、そういうヒントになったらいいですね。

○中島委員 今、お聴きしていてちょっと思い出したことがあります。

発災時の基礎知識のところの基本行動とかいろいろ出ているのですが、先ほど田中さんもおっしゃっていた SNS でデマじゃないですけど、昔の情報で間違っているとかあると思うんですけど、パニックになっちゃってそれを広めちゃうとか、あと自分もすごくパニック状態になってしまって思いもよらないことをしてしまうとかっていうことがあると思うので、発災時とかその後の自分の心の変化みたいなのって私は知っておきたいなと。冷静な判断ができていない状態なんだよということとか、非常時だからこそ、例えば自衛隊の方が救助に来て、ごはんを食べないと瓦礫が片付けられないとかというときに、ご飯を食べているのを見てすごく批判が集まったみたいな話を取材で聴きまして、でも冷静に考えたらそれって当たり前。食べなきゃ無理だよということだと思うのですが、でもそれが判断できなくなっちゃうぐらいパニック状態になるということを知れたので、きっとそう思わないで済むというか、でもこれは一時的なことなんだってきっと思えるのではないかなと思って、心がどう変化するかという知識を得ておく。

デマに流されやすくなっちゃうんだよとか、簡単なそういう状況に陥りやすくなっちゃうんだよとか、助けをなんとなく待つてしまうかもしれないけど、そうじゃないんだよとか。そういう心のことをコラムでもいいのですが、何か触れておくとすごく役に立つのではないかなと思いました。

○池上委員長 そうですね。とても大事なことで救援に行った人っていうのは、飲まず食わず、24 時間不眠不休でという言葉が昔はあったのですが、あれはバツですね。生身の体ですから飲まず食わずで眠らないと病気になってしまいますよね。

被災者は避難所に行って何かやってもらっただけっていうお客様になってしまうので。今はだいぶ変わってきましたけど、救援に来られた方が仮眠しているだけで、「何こんな時に寝てるの。」とか「食事なんかして。」って言われちゃうんですよ。だから、それは被災者の見えない所で、バスのカーテンを閉めてというふうにするようになったのですが、それぐらい厳しく言われるので、行政の悩みかもしれませんね。だから、心得が必要です。被災者にも、そういう急に來てくださった人たちに感謝して、休むときは休んで、食べるときは食べないと、やっぱり体がもたないんだということが分かるような、普段の中でそれが皆さんにも浸透していくと、そういうトラブルにならないと思いますが、まだまだありますね。

○中島委員 そうですね。だから、救援の方だけじゃなくて、隣の人に対してどう思ってしまうか、家族に対してどう思ってしまうか、自分よりも被害の軽い人に対してどう思ってしまうか。あと接し方が難しかったりとか。いろいろあると思うので、そこは一つ基準

があると、というかどうかというのかが分かること、ほっとするという知識として有効なのじゃないかなと思いました。

○池上委員長 やっぱりさっき五十嵐さんが体験談をとおっしゃった。やっぱりそこで聞きしたお話、後で考えたら当たり前なことで、被災後にはまともに取れなかったけど、当たり前に食事をしたり、寝たりというのを私たちと同じようにしていけないといけないのだなということに気がつくとか、そういうお話の中で解説できたらいいですね。

○五十嵐委員 避難所生活のところで、共助の部分がちょっとないかなと思ったので、避難所に行って、みんなでどういうふうに協力するかというような項目も一つあってもいいのかなと思いました。

○事務局 例えば、32、33 辺りで助け合いの心を大切にとか、決めたルールは守る、みんな協力とかってというのが。前に、ご意見頂いたものです。

○五十嵐委員 そうです。

○国崎委員 私は別の視点での共助を思っていて、これは私の講演でもよく言うのですが、女性の応急手当の方法、女性の力での搬送、それから女性の力での救助はこういう方法がありますよと具体的に言うのですが、一般的には搬送だと、担架の作り方のような、体力任せの搬送になってしまう。そうではなくて、よっぽど椅子を使ったらいいんじゃないのって思うわけです。

そういった女性ならではの安全で自分の体力にも負担のない搬送方法とはなんぞや。それから、どんな資機材を使えば女性でも救助ができるのかとか、これは子供にもそうなのですが、自分よりも体の大きいお父さん、お母さんをどうやって子供が、幼稚園児が搬送するのかということも教えているのですが、そういった女性でも搬送できる、救助できる、応急手当もそうなのですが、女性が扱いやすい、いつまでも三角巾じゃなくて、あれは二人いないとできないのですが、一人でできる方法のものもあって、そういったものも紹介しながら、これだったら応急手当できるよねというような、ということをやっぱり伝えていくと、それが共助の方にもつながっていくのかなと思います。

○富川委員 私もよくセミナーでそういうところをお伝えするときに、私たち母親目線と言うと、お母さんの中にはどうしても自分がやっぱりまだ要配慮者だと思っている。小さい子を抱えているということは、私は弱者だというような感覚の方もまだまだ多い認識があります。

とはいえ、子供が小さいだけで立派な成人女性たちなので、そこはやっぱり受け身じゃなくて避難所生活というのをもっと能動的に、自分が参画するというような認識をもっと持ってほしいということで、自主保育の勧めみたいなことをしているのです。

お母さんたちの中でコミュニティを作って、一定の子供たちを誰かが預かる。その体が空いたお母さんたちが、共助にどんどん自分たちで参加していくというようなところをすごく伝えているので、そういうモチベーションというか意識をもっと能動的に、自分も受けるだけではなくて、運営に参加するのだというようなことをどこかで伝えられるといい

かなと思います。

○池上委員長 ご紹介ができて、それで富川さんのような方が避難所にたまたまいらして、ちょっと一言かけるとそういう動きになるんですね。

○富川委員 そうですね。これは本当に、避難所に一人とか二人でもいいかなと思うので。

○池上委員長 できるだけたくさんそういうことを知っている方がおられるとすごく動きやすいので、どうしても避難所というのはお客様なる人が。でも、ちょっとこれ手伝ってくださいというと、我に返ってやってくださるといことも聞きますので、やっぱりいろんな情報をこれで伝えられたらいいですね。

○事務局 たぶんその通りだなと思うんです。例えば、28 番のトイレについてというのが、例えば、「水が流せませんよ」みたいな情報を書くべきなのかどうか。トイレの使い方って「東京防災」の方でも載っているのですが、それよりも女性に焦点を当てて絞っていった方が良いのか。その辺は、どうでしょうか？

あまり、「東京防災」と重複する情報は載せない方がいいというのであれば、いわゆる本当の基本的なノウハウみたいなものは一応紹介するとして、あとは本当に女性から見て何が大事か。そういうことを書いた方がいいのか、その辺を。

○池上委員長 これに載っていないくて今、例えば用を足してその臭いを消すための薬なんというのでもいいのが出てますよね。そういうのもご紹介できたらいいかなと。

それで、今おっしゃった「東京防災」にトイレの部分が載っているのなら、こちら新しい情報を紹介して、基礎的なことは「東京防災」の何ページにということもやると親切なかなというふうに思います。

○事務局 大体ボリュームの関係もあるものですから、いわゆる本当の一般的なノウハウは掲載しなくてもそれはいいのかなと思ってはいるんですけど。

○池上委員長 そうですね。この部分は「東京防災」のページ参照ぐらいでもいいのかもしれない。できるだけ新しい情報、しかも女性の視点で、皆さんからご意見が出ているようなことを盛り込めればいいのかなというふうに思います。

○事務局 今、いろいろ追加すべき点とか、伝える際の留意点とか、こうやった方がいいよというご意見をいろいろ頂きました。それを踏まえて、まず大まかな構成とか、小項目だけについては一応これをベースに原稿は肉付けをしていきます。

○池上委員長 また今日話し足りないことは、今月中にどんどん事務局にあげていただければと思います。

○事務局 お寄せいただいたものをベースに、またいろんな所に取材に行くなり、情報を取るなりして中身の肉付けをしてまいります。

原稿案と言う形で、ひとまず作成したものを次の委員会で皆様にご紹介して、また見ていただいて、もしかしたらここもところ書いた方がいいよねとか、これあまり実は書けないねとか、そんなに「東京防災」と変わらないねとか、実はこういうのもあるねというのをまたおっしゃっていただければ。とりあえず、たたき台を次までに原稿案という形で

お持ちしたいと思います。

○池上委員長 分かりました。意見を踏まえて、たたき台が出てきて、そこを私たちが議論を深めて、どんどん積み上げていくという形で。

それでは、もっと議論したいところですが、次の「読んでもらうための工夫」というのが残っておりまして、これを検討したいと思います。事務局の方から、説明を。

○事務局 資料の5ですね。いろいろとご意見を頂いておりますけど、やはり作って終わりではなくて、ずっと使ってもらえるような本にしていきたいということがありますので、そのための工夫を凝らしていかなければいけないだろうと。防災にあまり関心のない人にも防災の情報を伝える。防災が自分の生活にも関係するのだというふうに興味を持って、気づいてもらうことが必要かなというふうに思っています。

そのためにも、防災に取り組むきっかけとして、一つやはり私事化を図るための工夫が必要だろうと。もう一つが、マイブック化と書いていますが、一時の活用だけでなく、長くその本に愛着を持って使ってもらえるような工夫を凝らしていけたらなというふうに思っています。具体的な企画案については、制作会社からご説明いただければなと思います。

○制作会社 巻頭企画というのがあった方がいいんじゃないかと思っております、いざという時が来たらどう行動するのかというのは情報として入るわけですが、それから始まることや見たくなくなるというか、「東京防災」とも重複したような情報になりますので、まず「いますぐできる！30のこと」というか、あなたももういくつかやっているよというようなことを紹介しながら、防災ってこうやって取り掛かっていくんだということを伝えられればよいのかなと思っております。

ただ、「いますぐできる！30のこと」の最後の方には少し防災として心得て、真摯に取り組まないといけないことも交えております。

これもまたいろいろと皆さんにご意見を伺いながら、我々でもっと適切なものになるように作っていきます。

以上が巻頭企画として、今日ご用意したものです。

次は、今、冊子の中にはありませんけれども、この本をきっかけに暮らしが変わり始めた瞬間とか、これで防災ってできるんだと思ったような、それぞれの世代の四コマ漫画みたいなものがあるといいのかなと思います。

四コマ漫画が各章の左右に箸休め的にコラムとしてあると、それはそれでコラムだけ先に読んで中を見ていこうかなと、防災ってこんなことだったと敷居を低く入ってきたときに本編を読むきっかけになると思います。実はペットボトル3本買うだけで防災かみたいな、そういうすごく敷居の低いところから本を漫画にしていくというようなこともあるのかなと。

次はコラム案です。いろいろな世代、いろいろな暮らし方がある中で、例えば働いている女性でほとんど家にいないけど、たまたま家でドラマ見ている時にドカンと家具が倒れてきたりとか、先ほどもシミュレーションという意味では、なるべくその人その人がその

世代、世代とか暮らし方によるシミュレーションになるような部屋の紹介の仕方をします。次のページにも3つ、世代、一人暮らし、持ち家の場合とか、要介護者がいる場合とか、限られている一面ですけども幅を見せながら、こんな人の部屋はこんな感じかなということを読者の皆さんが自分と照らし合わせられるような形で作っていくという企画です。

次は、星占いとか血液判断、心理テストというものを防災にしていけるのはどうかなと。例えば「ピンチの時、あなたに一番必要なものはなんですか？」とか、「あなたが真っ暗な道で一人で歩いている時、出会ったのはどういう人ですか？」みたいなことを言うと、それによってあなたはこういう性格の属性だから、こういう備えをしたらいいのではないかなという、そういうことから興味を持ってもらえるように導いていくというのはどうかなというものを、章末に仕込んでいくという感じにしたかどうかというご提案です。

次は、自分事化のための企画です。

たぶん、やるべきシートみたいな、ToDo リストみたいなことになってくると気が重くなっちゃうと思うのですが、興味を持ったところにマークが付けていけるとか、自分の手帳を工夫するように、付箋とかミニシールを付けて、「すぐできる」とか、「じっくりやりたい」とか、「いつかやらなきゃ」という付箋を本に付けていってもらい、付箋が増えていくと本に愛着が湧いていくかなと思います。

もう一つは、大切な人のインタビュー。もしものときを想定して、家族や友人にインタビューをして、その内容をメモができ、書き込むことで親しい人と防災を話すきっかけになるかなと思います。先ほど、第1回のところで防災グッズをプレゼントするといよいよねというお話がありましたが、防災が人とのコミュニケーションの中に、さらにこの本を使って介在することで絆が生まれていくといいかなということでも考えました。

○池上委員長 ありがとうございます。ご意見をどうぞ。

○富川委員 先ほど、ちょっと五十嵐さんともお話していたことなのですが、女性って割とオピニオンリーダーが言っていることがとても響いたりするので、例えばスタイリストさんとか、一見あまり防災にももとは興味がないのだけれど、第一線で活躍をされている女性というのは、きちんと備えもしている女性なんだよというようなことを言ってあげると良いと思います。

今、みんな禁煙しているような世の中になったのは、10年前、20年前では考えられなかったことだと思うんですけど、それってタバコをやめることがカッコいいというふうになったからだと思うんです。そういう感じで、防災をしている女性が輝いている女性なのだというような、リーダー的な人たちの、あなたの防災を見せてくださいじゃないですけど、バッグのポーチを見せてくださいみたいな感覚で何をしていますというのを、いろんなところから入っていたりすると、「私のあこがれの人が、こんなふうになっているんだ！」みたいなことで、どんどん広まっていくきっかけになるんじゃないかなと思っていて、ちょっと緩い企画を入れられるような要素があるのだとしたら、ファッション誌じゃないですけど、そういう要素を含んでも面白いのかなというふうに思いました。

○五十嵐委員 被るんですけど今お話ししていた内容で、うちの学生だけじゃなくて、いろんな世代の人にもそれを聞いて、企画が可能かどうか分からないですけど、芸能人 みんなが知っているような人が防災やっていますというところがあると、「そうなんだ！」と、冊子を手取るきっかけになることもあるかなと思います。もし、そういうことが可能であれば、そういう企画もあってもいいのかなというふうに思います。

○池上委員長 アピール度はありますよね。

○田中委員 私、いいですか？

○池上委員長 はい、どうぞ。

○田中委員 四コマ漫画のところで、女子だったら「タラレバ女子」のやつがいいなと思いました。

私、福島に移住して1年間福島の被災された方と、震災直後からずっと避難所で一緒に暮らしていたのですが、被災者女子会みたいなのがとても面白かったですよ。テレビには出しちゃいけないような話からなにかから、被災した女子だから言えることあるのよねみたいな話がすごく面白くて、でも絶対メディアには載らない内容なんです。そういうリアルな女子会のテンションの四コマの方が、楽しいと思いました。

○池上委員長 たしかにそうかもしれませんね。どうしても、模範例をやることはあるけれども、そういうのではなくて、そんなこともあるんだみたいな。本当はしっちゃいけなようなこともあるんだみたいな、被災地ではというのが分かる気づきにはなると思いますがね。中島さん、何か。

○中島委員 なるほどと思ったのですが、先ほどの案の四コマがあって、私も漫画ってすごくいいなと思いました。

というのも、今、女性たちの中で本が売れなくなっているのにも関わらず、コミックエッセイ市場だけは爆発的に伸びています。それって、ママたちが支えているのですよ。本は読めない、文字は読むの辛い。だけど、例えば緩い絵で、すごく書き込みがあるわけじゃなくて、読むのにもすごくサラッと読めるのに、自分たちのリアルな気持ちに寄り添ってくれるような、例えば子育てのことかもしれないし、片付けのことかもしれないし、火事の大変さなのかもしれないし、ワンオペのことかもしれないし、そういうもののコミックエッセイの市場ってやっぱりすごく伸びていて、これだったら読めるし、読みたいと思っている方が多いのだなと思います。

そこに今、田中さんがおっしゃったような、実際にこういうことがあったけど、でも面白かったよねみたいな、うまいこと乗り切れたよねみたいなものって読みやすいし、実際に読めるし、今の女性との親和性がすごい高いような気がするので、それは五十嵐さんもおっしゃったようなシミュレーションに近いようなことなのかもしれないですけど、コミックエッセイっぽいものを挟むというか、四コマだけじゃなく、もうちょっと長いコミックエッセイみたいなものが章の間に挟んでくるとか、予算とか、時期とかの問題はいろいろあるとは思いますが、今の女性とすごくフィットしているのではないかなと思います。



○富川委員 それ本当にそうなので、私が本を作った時にやっぱりふんだんにコミックエッセイを中に挟んでいるんですよ。本当にあるあるというか、「実際に被災したママ あるある」みたいなのを入れてくれというオーダーをしたのですが、そこだけしか読まないという人もいるぐらいです。なので、普通に文字のエッセイよりも、頭に入ってくるというのは本当にたしかです。絵をふんだんに使うというのはいいかなと思います。

○五十嵐委員 すごく分かりやすいんですか？

○池上委員長 分かりやすいです。パラパラとやって、漫画というのは目に入りやすい。やっぱりそこに目が引き付けられますよね。今、皆さんのお話がうかがうと、漫画がいいということで、漫画だけではなく、コミックエッセイっぽい、ちょっとそこに肉付けしたようなものがあるといいなということ。

それと、被災した女子会。それこそ、マスコミの人が周りにいたら絶対そんな話が出てこないよという話が、本当にあったことというのは、すごく興味があって、なかなか伝わりにくいんですけど、もしうまく伝えられたらそんなのもいいかなと個人的に思います。

国崎さんは、よく被災地に行かれるので、いろんなことを見聞きして、何かこんなことというのはありますか？

○国崎委員 まず、四コマ漫画について先ほどの項目のところにも、どのように入れたらいいのかとちょっと悩んでいたのですが。

先ほど女性と言っても多様なお立場があって、そういった中で例えば、漫画がどのような形でもいいんです、四コマであったとしても、もう少し読み応えのあるものでもいいのですけれども、実際に被災地で起きたことに対して私たちはまだ答えは出せない、これは行政が関わっていかなくてはいけない、国が関わっていかなくてはならない問題があるのだけれども、知っておいてもらいたい問題というのは被災地ではあります。

例えば、子供が被災した時に多くの方が心のケアというのですが、なぜ子供の心のケアを必要とするのかと言うと、避難所や仮設住宅を転々とする中で、転校を余儀なくされるんですよ。そうすると、半年なり3年ぐらいまったく違う友達、学校に行かざるを得ない辛さであったりとか、あとは仮設住宅の狭さから学習能力が低下したりとかという、子供への影響、こんなことがあったよとか。あと、仮設のお風呂というのは、男性、女性分かれるんですよ。そうすると、老夫婦の世帯で何が困るかと言うと、家だったら夫の介護でお風呂に入れていた奥様が途端に入れられなくなるのです。なので、被災地でママとして困ったこと、どうしようもできない、転校はごめんねということだったりとか、夫をお風呂に入れられないという問題であったりとか、そういうことも答えは出せないんだけど伝えたい。これで言うと、答えを出さなければいけないところもあると思うのですが、出せないところに関して伝える方法、手法として漫画というものもあるのかなというふうに思っていました。

○池上委員長 ありがとうございます。ほかに、いかがでしょう。

○事務局 巻頭企画に「いますぐできる！30のこと」の企画案として提出させていただく。

その辺りはいかがですか？

○国崎委員 これも先ほど言った体験談とか、私が言った女性特有の困り事っていうのを最初に持ってくればいいのかなどと思ったり。

○中島委員 ここにその体験談が、なんでこの30かというのを、こういう体験があったからというのが分かるようになっていて、この企画自体はすごくいいんじゃないかなと思います。

この「いますぐできる！30のこと」の巻頭がすごくいいと思うんですね。自分がいつもやっていることが防災になっているみたいなもので、身近だし、デザインもすごい素敵だなと思います。イラストがあって、これやってるよねみたいなものとか、これやればいいんだねみたいなこととかがすごく伝わりやすいし、巻頭にぴったりの企画だなというふうに思いました。

この企画があって、こんなことが防災に繋がっているんですみたいなのがあって、「女性では」という話に入っていくとか、長い前段として、これがまずあってから女性が防災を考えるときには、こういうことがあって、こうなっているんですよというの長いリードとしてあるというのがすごくいいな。

○池上委員長 最初のハードルを低くして、30のことというのがあって。

○中島委員 この30というのが、助かる暮らし方という企画の象徴な気もするので、それがあって、女性特有のことが前段的にあって、さあじゃあどうしたらいいかというのはいいと思います。あとは、イラストの描き方一つで女性っぽくなると思うので、今はこれ「東京防災」のイラストとかを使って作っていらっしゃると思うんですけど、それが女の人になるだけで、だいぶ印象も違ったりもするし、お部屋とかグッズとかが変わってくるだけでもだいぶ印象も変わって、ずっと女の人らしくなるのではないかなと思います。

○国崎委員 中島さんにお聞きしたかったのは、深層心理の。

○中島委員 面白いなと思いました。もし、やるなら防災のシチュエーションに絡めたことにしちゃってもいいのかなとか、わざとだと思うのですが、「真っ暗な森を」という全然違うことにしているんですけど、例えば「地震だと思った時に、誰の顔を思い浮かべますか」みたいな、そういう逆に地震のことに寄せちゃった心理テストとかにしちゃってもいいのかなと思います。例えば、「避難所で誰かに会いました、それは誰？」みたいなことでもいいかもしれないし、なんでもいいんですけど、そういう心理テストにしちゃって、もう一冊通してそれにしちゃうというのもありかなというか。ただ、かなり飛んだふうに思えるのかなと思えたので、でも心理テストというのはすごく面白いし、やってみたいし。

○国崎委員 やってみたいくなりますね。

○中島委員 シミュレーションの話あったんですけど、クイズ形式というか、これってどうやってやるのか、○、×みたいな。そういうゲーム性があるというの面白いなと思うので、その延長で少し心理テストが絡んでくるというのは面白いんじゃないかなというの思いました。

○池上委員長 今、中島さんがおっしゃった「地震の時に、誰の顔をまず思い浮かべますか?」、これ面白いですよ。日頃の付き合い方、家族との付き合い方。お父さんがなかなか出てこないとかね。まず、息子、娘。本当に阪神大震災であったんですけど、悪気なくおじいちゃん、おばあちゃんがいることを忘れちゃってた。まずは、自分の家族が無事だよかった。お父さんはちょっと入院中だったんです。ふっと本当に後で気が付いたんですけど、おばあちゃんがいることを忘れていて、本当に申し訳ないことをしたというのがあるんですけど、やっぱり家族の中にも助ける順番があるってこのことだなと。ましてや、ご近所なんかは特に付き合いの濃いところに、やっぱり行きますよね、自分の家族が無事だったら。それをよくお話するんですけど、男性の多いところでは、男の人はみんな下を向いちゃったり。そっか、最後かっていう感じで。

○国崎委員 でも、今の企画は、地震から離れている感じから始まる箸休め的で面白いなと。しかも、解説もすごい上手くできていますね。納得します。素晴らしい。

○池上委員長 私、何選ぶだろうって思っちゃいますよね。ちょっと防災と離れているような感じも面白い。それから、防災の心理テストみたいなものが入ってくると面白いですね。ほかに、何かありますか？

○事務局 マイブック化とかは。

○五十嵐委員 本の中で付箋を使うということ？

○事務局 そうですね。

○五十嵐委員 本当に学生の話ばかりで恐縮なんですけど、学生は、付箋をいいと言っていて、付箋の下のところには防災の準備をすることが書いてあったらいつも使う物なので頭に入ると言っていたんです。付箋を使った時に書いてあるので、これを準備しなきゃというような。ちょっと提案の使い方とは違うのですが、ものを付けるなら付箋とかペンがいいって言われて。ペンも授業中だったら見ると言われて。暇なときに見るから頭に入るといことは言われました。ちょっとそれは世代が違う話ですけども。

○池上委員長 好きですよ。すぐできる、じっくりやる、いつかやりたいという3種類の断捨離のことを思い出して。すぐできるものは、すぐやってほしい。

○事務局 またちょっとご意見あれば。

○池上委員長 まだまだご意見があると思いますが、事務局の方によろしく願いいたします。最後になります、資料7の説明を。

○事務局 今回、デザインということでお聞きしますが、この先、原稿案を作っていくにあたって、縦書きなのか横書きなのか。基本的なレイアウト、イラスト、バランスなどにおいてはある程度、共通認識を持って進めていきます。縦書き、横書き、バランス等につきましては、ここで、いろいろとご意見を聞いて、大まかに決めていきたいなと思います。

○制作会社 お手元にある資料を見て直感的に思われる部分がほとんどだと思いますので、あまり説明はしませんけども、ただこの先作業を進めていくうえで、縦組みなのか、横組みなのかということを決めていきたいと考えています。

縦組みだと情報のまとめた辞書というよりも、コンテンツの載っている読み物というような印象を、まず読む人に対して与えられるのではないかなという事で、我々としては縦組みがいいのではないかなというふうに思っています。

それと、色ですが、赤系というのは精神的にも活力とか、情熱とかっていうエネルギーややる気とかっていうことをイメージする色だということが、色の本に書かれてあるのですが、ここに込めたのは、要するに生命力とか命。ただ、真っ赤とかピンクになってくると、人によっては違和感があるかなという部分があると思うので、ちょっと濁らせて、紅赤という色にしています。ちょっと濁らせて深みを与えることで、普通の真っ赤よりも、落ち着いた色になるかなという思いでしています。表紙の色は、女性が親しみやすく、命という意味合いも込めて、男性にも取ってもらいやすいような色にしたいと思います。

イラストですが、「東京防災」のイラストレーターの中で、女性にいいと思っていただけるような作りということで、色数を絞ってまとめてきたわけです。

先ほど、皆さんが内容のところでおっしゃっていた話を盛り込む、体験談を盛り込んだり、いろんなことをすると文字数が増えますが、文字数としては、今資料でご提示しているくらいの量でうまく収めていきたいと考えているのですが、体験談がどこまで入れられるかという、そのせめぎ合いになってくるかと思っています。飛ばすのだったら飛ばした先に書いておくのかもしれないし、この30だけは読み切ってもらえるくらいの文字数でやっていきたいかなというふうに考えています。

巻頭企画の先に行くと、各章の見え方です。各章は、巻頭企画には少しクリーム色を伏せているんですけども、そこの差異を出すために白のふちで、微差なんですけれども違いを出していく。

一方、この萌黄色。防災・安全とかは、グリーン。グリーンというのは、中間なので男女問わずもみんなを引き付ける魅力があって、そういう萌黄色というのは、ちょっとこのグリーンだと防災っぽい感じがしたので色を調整しました。

こういう萌黄色にすることで、新芽が萌黄色で、少し成長した緑なんですけど、こういうときの生命感とか柔らかさとかしなやかさとか、防災っぽい普通の緑とかオレンジを使わないで、グリーンを使うということで、新しい防災にシフトするアイコンになればいいかなというふうには思っています。

中に関しては、色を各章で変えていく。例えば、トップの巻頭企画では、萌黄色というテーマカラーを軸にブルーと2色攻めでシンプルにしていきます。第1章からは、先ほどの紅赤色ではクリーム色をなくして白にするということでしたが、こちらはブルーというものを第1章では使っていく。第2章、第3章というのがどんどん色が移っていく。

いずれも好き嫌いがあると思いますし、この後ユニバーサルデザインで文字が読みやすいのか、読みにくいのかというのが色の関係で非常に影響を受けますので、その部分では若干色味が濃い方に転ばざるを得ない場合もあるのですが、基本的な考え方は、この2色で考えていきたいかなと思っています。

また、ページの隅にコードがあります。これは「ユニボイス」という、音声読み上げの情報が入っているものになります。視覚障害のある方にも情報が分かるように、今回こういったものを元々の設計として入れ込むということにしています。こういうコードは、「東京防災」には付いていませんが今回はこの冊子の中にそれを入れています。

また、「東京防災」には多様な色が入るということで、ユニバーサルデザインの認証を取っています。今回、同じようにカラーユニバーサルデザインを取ります。審査が必要ですので、先ほど言いました通り、淡い色合いよりは、やはり色弱の方に対してはコントラストのはっきりしたものというのがベターということがあります。ただ、いろいろ工夫はしていきます。

○池上委員長 ありがとうございます。いろいろとご説明をいただいて、まず縦書きか横書きかは今日決めてほしいということがありましたので、そうしないと先に進まない。

○事務局 雑誌は右開きで、「東京防災」は左。我々として悩ましいのは、英語版を作った時に、またどうしようかということにもなります。今も実際、横書きではあるので。

○中島委員 英語版というのは作られるのですか？

○事務局 作ります。冊子自体は、来年度になります。

○中島委員 もしも、縦で組んだときに英語版を作るとしたら組みなおしをするということですか？

○事務局 組みなおしです。もちろん、字のボリュームが日本語と英語では違いますので、英語の方がボリュームが大きいので、やっぱり字が小さくなったりはしますけどね。

○中島委員 そこまで配慮して考えた方がいい感じ？それとも、とりあえず日本語版を作るということを注力すればいいのかというどちらでしょう。

○事務局 やらうと思えば可能ですが、ただ、判のサイズがちっちゃいので、英語は大抵文字の量が2倍近くになりますので。

○五十嵐委員 それだったら、やっぱり横と横で対訳になっているような感じに使える方がいいような気がするんですけど。日本人と一緒に住んでいる外国人の人に説明する時に、自分が持っている物と外国人とで持っている物とで説明できるようなことに配慮すると、横と横の方がいいように感じました。

○池上委員長 若い方たちは横書きになれている？そうでもない？縦書き？どちらも対応？

○田中委員 どっちでも。

○池上委員長 どっちでもオーケー。

○田中委員 量が多くなければどちらでも大丈夫です。

○中島委員 読みやすさで言ったら縦だと思います。あと右開きだと思います。

印象は、たぶん若干異なってくるとは思うんですけど、右開きでこのテキスト量だったら私は右開きがいいと思います。たぶん、保存性が左よりも高くなると思います。

例えば、文庫読むとか、小説読むとか、大概の日本の雑誌もそうですけど、右書きにし

ているので読みやすくなっているというのがまず1個あるのと。左開きって、割とパンフレットと違って左開きなわけじゃないですか。その印象もたぶんどこかで刷り込まれていて、ちゃんと何回も読もうかなと思えるものってたぶん右開きになるかもしれないです。それは、たぶん心理的なものだと思うんですけど、「東京防災」に関しては量もかなりあるというのと、意識的に横組みですべて組まれていると思うんですけど、テキスト量として、たぶん増減しやすいのは縦なんですよ。

なので、私は一章、二章とかの章に入った時のテキストがもう一声多い方がいいと思います。逆に、30 のことに関しては、もうここにはリードは何も入れないで、項目に詳しくは何ページ。とにかく、この行動だけを読ませて、あとは飛ばすというふうにして、飛んだページを読めばきちんとその理由が分かる。その理由を読ませるためには、もう一声だけ、そんなに増やさなくていいと思うんですけど、メリハリをつけて文章を多くすることをする、すごく構造も整った文になるから分かりやすい。そして、何度も読んでもらえる本になるという気がするので、私だったら右開き、縦書きです。

○池上委員長 ありがとうございます。ほかに、ありますでしょうか。説得力があって、納得してしまいましたね。

○五十嵐委員 見やすいですね。

○池上委員長 よく読む本が縦書き？

○中島委員 はい。よく読む本はきつと縦になっていて、右開きです。パンフレットは、横で左ですよ。長い文章を読むときに、たぶん右の方が読みやすいんです。それは、利き腕の問題もあると思います。右の方がページをめくりやすいということだと思います。

○国崎委員 たしかに言われてみれば、違和感がありますよね。こちらから読み進めていくという。

○中島委員 たぶん右利きの方がほとんどなので、こうめくっていくという、この感じがたぶん大事。割と、リズムで読めるということが理由だなと思います。

○池上委員長 いかがでしょう。すごく説得力がありました。よろしいですか？私は、横書きがいいですという。

○中島委員 たぶん横にすると、一文の長さ、ストロークが難しいんですよ。横にするなら、ストロークをこれぐらいだったら半分に分ける、1/3に分けるということをするんですよ。そうすると、ここからいったらこっちに飛ぶ、またこっちに飛ぶという作業をしていくんですけど、たぶん縦だとそのストレスがない。こう読んでいける。段が分かれたとしても、こう読んでも別に違和感がない。という意味で、縦の方がいろいろ組みやすく、ビジュアルはしやすいとは思いますが。その分、見出しを横にするとか、でもほかの部分は縦にするとか。先ほどちょっと意見を出した、リアルボイスみたいなものは例えば、横にすると、縦の中に横が入るから目立ってくるのか。もちろん、それはデザインのプロの方がいるので、余情報だと思うんですけど、縦がいいのではないかなと思います。

ただ、翻訳とかそういう問題はあると思うので、ただ今お聴きした感じだと、もしも英

語版を作るとしたら、たぶんデザインは直さなきゃいけないし、イラストサイズとか、級数とかいろいろ変更しないといけないことが多いのだとしたら、日本語版を優先してまず作る。それが、例えば分かりやすい、面白いよということになれば海外の方も取っていただけるかもしれない、ということになるかなと思うので、そちらを優先して考えていいのではないかなと思いました。

○池上委員長 いかがですか。よろしいですか。まとまったようです。専門にやってらっしゃるから、説得力がありました。ありがとうございました。

○事務局 色の方は。

○中島委員 白抜きの文字は、このぐらい濃いベースであれば。ただ、色弱の方とかそこら辺の配慮のことは私もちょっと。

色合いのことは、黒文字にするのかとか墨にするのか、白にするのかというのはまた別だと思うんですけど、私はこのピンクの方が親しみやすいというか。一番、防災というものと離れた色なので、そういう意味で私のちゃんとした本もピンクを使っていますので、新刷りの方も一応ピンクをテーマカラーにしたんですけど、防災という言葉がピンクとある意味別なものなんですけど、中和してくれるというかなとも。

○池上委員長 柔らかい感じがしますよね。色を見ただけで。

○中島委員 かなとも思ったので、恋愛心理本とかほとんどピンクですよ。

○池上委員長 この色がいいんですかね。

○中島委員 こちらの頂いたものとかもそうですけど、それはやっぱりパッと目に入り、手に取っていただくという意味でも有効かなと。防災というテーマと逆の親和性もあるのではないかなと私は思いました。

○池上委員長 それから一つ気になったのが、この中のイラストは女性になりますか。

○事務局 これは、「東京防災」のものを今使っているので、書き下ろします。

○田中委員 色はなんでも私はよくて、どちらかと言うと、中がドットで色分けするのではなくて、3色が使われている方が色弱の人が見やすいので、色というよりも3色でトリコロールにしている方が、私はいいです。ドットも一個の情報になるので、目がパチパチして見にくいとか、両方同じピンクを使ったとしても、面で色が変わった方が、色弱の人には見やすいので、こちらの方がいいと思いました。

○国崎委員 読んで疲れないのは、やはり慣れている色なので、章ごとに色が変わるとそれだけで疲れちゃうような気がしますね。

○池上委員長 読んで疲れない。大事なことです。読み進んでもらわなければいけない。色使って大事ですよ。そういうご意見がありました。ほかに、何か。

○田中委員 ピンク＝女子感がすごい満載なのが、やっぱりずっと気になっていて、女子、女子している感が。好みなんですけど。ただの個人の好みだとやっぱり萌黄色の方が好きで、女子感満載なものは私取らないんですよ。だったら、まだ濃い目のピンクとオレンジの間とかだったら取れるんですけど、これはやっぱり女の子感がすごく強くて。

○池上委員長 逆に、拒否しちゃう。

○田中委員 拒否しちゃう。だったら、薄い紫とか、薄い黄緑とかの方が。もしくは、紺ベースで文字がピンクぐらいの方が、まだ。ピンクがおしゃれに使われているピンクがいいんですけど、女の子のピンクはハッてなっちゃうんですよ。趣味かな。

○中島委員 それはすごい分かります。たぶんファンシーに転んでいくと難しくなってくるんだと思うんですけど、割とピンクって本当に幅があるんで、かっこいいピンクってあるんですよ。それが、デザインにすごく生きてきたりするんで、たぶんファンシーには転ばないという感じで。たぶん結構暗い色になりすぎちゃうと、ちょっと堅いものに見えてくるとは思うんですよ。それは、デザインでフォントなのか、文字の墨の感じなのかで変えていってという方がいいかな。ピンクを使っていたとしても、ピンクってすごい汎用性がとてもあると思うので、女性＝ピンクというのは、ある意味偏見というか。

○池上委員長 決めつけないでっていうのは、ありますよね。

○中島委員 たぶん手に取りやすいっていうか、親しみやすい色ではあるので、そっちを優先するとしたら、あんまりファンシーに寄らないような表紙にするとか、何するとかっていう使い方はありかなと。中を見ていた時に、目が疲れないというのはすごく大事なことで、今作ってくださっているピンクの3色っていうのは、すごく読みやすい色なんですよ。とても読み進めやすい色なんじゃないかなとは思いますが。

○富川委員 白ベースってどうですか。

○国崎委員 私もそう思いました。ちょっとこれどぎついんですよ。これで、白抜きよりは、むしろ白ベースの方が、女子女子してないけれども、やっぱり女子的な感じも出ていいんじゃないかなと。

○中島委員 たぶんテーマカラーが1つ決まったら、そのバリエーションで後ろにピンク地なのか、ピンク地で黒文字を乗せるのか、白抜きにするのか、どんなフォントにするのかというのはデザイナーさん次第だと思うので。

○池上委員長 先ほどの表紙のピンクを見せていただけますか。

○中島委員 若干違うんですけど。

○池上委員長 なるほどね。やっぱり an・an 防災ブックの方の、色合いが落ち着いてますね。こちらはかわいいという感じ。

○田中委員 大人の女感出てますね。

○中島委員 シンプルにしたというのもありますけどね。

○池上委員長 十字の中に、いろいろ防災グッズが入っているってなかなか面白いですね。意見として、いろいろ出まして、すみません、予定の時間を大幅に過ぎているのですが、委員の皆様よろしいでしょうか。

(異議なしの声あり)

○事務局 では、今後の検討スケジュールでございますが、第3回目の委員会は7月頃を予定しております。詳細な日程、場所等につきましては、事務局より改めてご連絡いたし



ますので、よろしく申し上げます。以上でございます。

○池上委員長 それでは、これをもって閉会させていただきます。どうもありがとうございました。

午後5時00分開会